

## Nursing Intervention としての心理療法のあり方

### －神経症状を示す子どもへの看護的遊戯療法

#### English Approach について－

滋賀県立大学 看護短期大学部 大 脇 万起子

#### I 研究目的

慢性疾患を抱える子どもは、心身両面の苦痛から、神経性症状を示す可能性が高く、発達援助として、医学療法的アプローチと同様、心理療法的アプローチが必要と思われる。そして、看護者こそ、これを担い、介入して行くにふさわしい存在と考える。

この研究は心理療法的技法を看護介入技術として開発することを目的とする。この発想から、英語を関わりの手段とした介入方法を English Approach (以下 EA) と名付け、看護的遊戯療法として実践的開発を行った。

#### II 方 法

対象は病障害児の養護学校を併設する A, B, C, 3 病院の入院中及び外来通院中の内科的或は外科的疾患を有する小学生患者で、A 病院65名、B 病院9名、C 病院44名の計118名であった。

実施は毎週1回、1時間、下校後の子どもの自由時間に実施した。回数はA病院77回、B病院39回、C病院14回であった。

内容は教室形式で初歩からの英語を扱った集団的及び個別的自由遊びであった。

分析は Y-G 性格検査、P-F スタディー、バウムテスト、風景構成法、WESC-R、子ども用5領域自尊心尺度、VTR、アンケート、観察・情報により実施した。

#### III 結 果

各検査は実施初期と実施開始後適宜行ったが、

ほとんどの子どもの Y-G 性格検査で類型或は項目での変化が認められたほか、他の検査でも特徴的な変化が認められた。

そして、検査結果とほぼ同時期に多くの子どもに臨床的变化が見られ、スタッフ、家族からも情報を得た。具体的には、自己疾病管理能力の向上、言動による自己表出能力の向上、症状の軽減などである。子ども自身からも「明るくなった」、 「自信が出てきた」などの自己変容感の訴えを得た。

また、環境及び疾病状況などから来る心理的要因が深く関与していると思われる子どもほど、著明な変化が見られた。

詳細は発表時、事例を以て報告する。

#### IV 考 察

EAの効果は環境的アプローチと治療的アプローチの2つの効果により得られると考える。

環境的アプローチとしては①闘病生活場面から隔絶した空間・雰囲気の中で EA は展開されるため、患児はより一層、日常的ストレスから遠ざけられる：「ここは別世界や」「ここへ来ると気分がバアッとするねん」「病室やったら嫌や、ここがいい」、②逃れることの困難な身体的問題への安全の保障は EA 施行者が看護婦であることで確保され、そのことを患児も認識している：「私の病気のこと解ってるな？ほないい」「(喘鳴の)音聞いて、(遊んでいて)大丈夫やなあ?」、③ EAでは対象に応じて適宜集団的或は個別的関わりを取り、対施行者、対他児の適切な心理的・空

間的距離が確保され、情緒的安定が促される、が挙げられる。

治療的アプローチとしては①患児が心理社会的発達段階で恐らく不足していたのであろう経験（無条件の受容・承認・賞賛及びスキンシップ）の再構築がなされる、②発達に必要な基本的信頼感、自律性、さらには自主性が段階的に促される、③情緒的安定、自尊心が得られ、所属社会における自己の存在を適切に認識する、④患児自身の個別性を見出した対処行動が取れるようになる、⑤

情緒的安定、自尊心が強化され、神経性症状は軽快する、が挙げられる。

以上により、患児の心身の Cure 及び Care が分割的ではなく、統括的・同時的になされる効果は大きく、これを担うに看護者がふさわしいことが、本研究より推察される。

今回英語を媒体としたが、上記事項に配慮し、看護者が各自得意領域（趣味）に手法を見出し実施して行けば、看護的遊戯療法の新たな専門的分野として広がりは可能と考える。